

志村正道氏を偲ぶ

大須賀 節雄

(東京大学名誉教授)

人工知能学会の第4代会長を務められた志村正道氏が去る2017年7月23日に亡くなりました。81歳でした。これまでの研究業績や学問への寄与、社会的な活動から見ても大先生と呼ぶにふさわしい氏ですが、筆者とはほぼ同年輩で、長年親しく交友を保ってきた間柄として先生と呼ぶのは照れ臭く、志村氏と呼ばせていただきます。

志村氏は1960年東京大学工学部応用物理工学科卒業、1965年同大学数物系大学院応用物理学専攻博士課程修了、工学博士号を取得、同年大阪大学基礎工学部電気工学科講師を経て、1967年助教授に就任、1976年東京工業大学に移り、工学部情報工学科助教授を経て、1980年同大学工学部教授、情報工学科情報システム講座、1987年情報工学科人工知能講座、1994年情報理工学研究科計算工学専攻認知機構学講座を担当、1997年停年により退職、在職中の教育上、学術上の功績により同年名誉教授の称号を授与されました。一方、東京工業大学退職後も請われて私学振興に努められました。1997年東京理科大学理工学部経営工学科教授、2001年武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科教授を勤めています。

志村氏は、パターン認識、学習機械などの知的情報処理技術の新しい分野に取り組み、生涯を通して活発な研究活動を続けて参りました。国際的な活動を展開するとともに情報工学・科学の発展に大きな貢献を行ってきました。パターン認識研究においては識別関数のパラメトリックな学習方法や教師なし学習などに挑戦し、多数クラスの識別に拡張した理論を展開し、1974年には米国パターン認識学会より賞を受けています。今日人工知能の分野の研究が大きな展開を見せており、その中心はディープラーニングのように生体系モデルに基づく大規模学習にあります。志村氏の研究はその基礎を築くものであったといえます。同時に氏は、これら認識・学習の機能の諸研究成果をベースとして人工知能、知識情報処理に関する研究分野に進出し、我が国の人工知能など先進的な情報技術の発展に先導的な役割を果たすとともに、この新しい研究分野を振興するべく計画された新学会の立上げを積極的に支援し、新発足した人工知能学会の初代会誌編集委員長として学会活動の最も重要な柱である学会誌発行の基本方式を確立し、また本学会の人工知能研究会を通して我が国における人工知能研究の発展にも貢献され、次いで第4代会長を務めました。

今日、人工知能は第三の波の到来で大きなブームになっていますが、学会発足時の苦労は大変なもので、関

係者は皆手弁当で将来への道を切り開いた歴史があったことを今日の多くの若手研究者の方もご理解いただきたいと思います。人工知能がまだ海のものと山のものとも見極めのできない状況にある中で、志村氏はこの分野を推し進める先頭集団の一人であり、これ以後の人工知能研究の発展に大きく貢献しました。これは志村氏の研究姿勢からきております。氏は現状に留まることなく、常に前向きに進むことによって、一歩先を見通し、研究のリーダーシップを取ってきました。

それと同時に志村氏は情報工学の若手の育成にも熱心に取り組み、プログラミングに関する教科書や演習書も多く、情報工学教育への寄与も大きいものがあります。幅広い視野のもとに先端的な研究に目を向けるとともに、これらの研究を通して多くの学生に研究の重要性と楽しさを体験させてきました。特に留学生の教育・研究には、その国のリーダーとなるべき人材を育てるべきであるという理念に従って、国際的にも評価されるような博士課程の学生を育て、多くの人材養成に尽くしました。

これらの教育・研究を進める傍ら、旧文部省(現文部科学省)関係で全国理工系情報学科協議会会長、大学評価・学位授与機構審査会専門委員、文部省教科用図書検定調査審議会調査員、文部省私立大学研究設備費等補助金選定委員、日本学術会議情報工学研究連絡委員会委員などを、また他省庁関係では新エネルギー産業技術総合開発機構全国地熱資源総合調査委員などを歴任し、情報工学の発展に尽くしてきました。

これらの活動に対し、前記国際パターン認識学会賞のほか、1978年手島記念研究賞、1997年人工知能学会功績賞、1998年人工知能学会論文賞、2005年情報処理学会フェロー、同年電子情報通信学会フェロー、2007年人工知能学会フェローの受賞および認証を受け、平成26年秋の生存者叙勲において瑞宝中綬章を受章しています。

紙数の制約で表面的になってしまいましたが、最後に筆者が個人的に受けた同氏の印象をもってこの拙文を閉じることにします。氏は温厚な紳士ではありますが、ときどき鋭い警句を発し、それが当を得たものであるだけに言われたほうは反論もしにくい、といった面もあり、それが氏を俗に言えば少々煙たい存在にしていた、という人間的な一面もありました。

志村氏がこのように早い死を迎えたことを心から残念に思い、この拙い追悼文を書かせていただきました。今はただ氏のご冥福をお祈りするばかりです。